5

宇久島（長崎県佐世保市）

【レポート】

住職と団体職員——三八歳、それぞれの挑戦

ライター　竹内　章

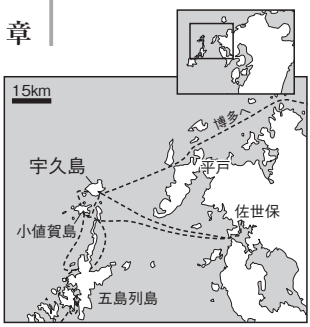
五島列島（※註）の最北端に位置する宇久島。佐世保から高速船で八〇分、住民約二〇〇〇人のこの島は、かつて単独の町として行政運営されていたが、二〇〇六年春、佐世保市に編入された。

平安時代、平清盛の異母弟である平家盛が上陸して島を平定。その子孫が後に福江島に渡って城を築き、五島を統一したという伝承が残っており、宇久島は「平家ゆかりの地」としても知られている。

古来、アワビ漁が盛んで、江戸時代は捕鯨も活発に行われた歴史がある。現在では、島の産業を支える柱の一つが畜産業で、仔牛を産み育て販売する繁殖農家の数は約一〇〇戸。繁殖用の親牛はおよそ一四〇〇頭飼育され、年間約一〇〇〇頭の仔牛を出荷している。後継者不足により廃業に追い込まれる農家も多いが、奮闘している若手経営者もいるほか、近年は仔牛の販売単価が高値で推移していることが「宇久の産業での明るい話題」（佐世保市宇久行政センター）だ。

一方、島の産業にテコ入れを図るべく、太陽光発電、風力発電、オリーブ産地化といった民間事業者による大型プロジェクトも進んでいる。これにより島に一〇〇〇人を超える労働者が入ってくるとの試算もあり、今後の動向に注目が集まっている。

昭和三十年代のピーク時には約一万二〇〇〇人いた島の人口は減少に歯止めがかからず、近年は年間一〇〇人ほど減少しているのが実情。宇久行政センターによると、二〇一七年度の島への移住者数はセンター把握分だけで九人（Uターン・移住者の家族を除く）と、「思ったより高い数字」（同センター）を記録したが、中期的にみると力強さに欠ける。



宇久島：佐世保市の北西約60km、五島列島の北に位置する島。面積24.9km²、周囲37.7km、人口2,000人（平成30年5月現在）。旧石器～弥生時代にかけての遺跡も多く、古くは「有救島」と記された。海上交通の中継地で、五島列島の文化の発祥地ともされる。和牛放牧と漁業が盛ん。

市は、空き家改修費や家賃の補助など、移住者向け支援メニューの整備を図っている。

このような環境の中、今回はカフェのマスターから住職への転身を機に島に移住した経歴を持つIターン男性と、海の資源を生かした新規事業の立ち上げを模索する「孫タターン」の男性を紹介する。

（※註）離島振興法における離島振興対策実施地域指定では、宇久島は平戸諸島に含まれる。

カフェ経営者から住職に転身

妙蓮寺住職／Iターン　佐々木浄栄（じょうえい）さん

突然できた現職との縁

七年前のある日、宇久島の高台にある見晴らしのいい日蓮宗のお寺に、若い住職が海を渡ってやって来た。

もともと宇久に縁があったわけではない。お寺の家に生まれたわけでもない。仏教の知識もなかった。直前まで営んでいた仕事は、カフェの経営だ。まったく未知の世界で、ゼロからのスタート。さらに、最初に預かることになったお寺は長崎の離島にあった。

「お坊さんになれば人の役に立てるのではないか、人の苦しみを少しでも和らげたり癒したりできるのではないか。そんな気持ちになったことが、お坊さんになったきっかけでした」。真っすぐで澄んだ瞳が印象的な妙蓮寺の住職・佐々木浄栄さんは、そう言って当時を振り返った。

佐々木さんが、ワーキングホリデーで滞在していたカナダで知り合った妻・留美さんと福岡県でカフェをオープンしたのは二八歳の時。カフェ経営は長年の夢だった。

ある日、長崎の住職が客として来店した。住職は明るく人懐っこい性格だったこともあり意気投合。気がつけば福岡に来るたびに店に足を運んでくれる常連となった。その住職は、帰り際にいつもこう言った。「接客なんかを見ていると、マスターはお坊さんに向いているようだから、なってみないか」。最初は冗談としか思えなかったが、住職は来るたびに同じことを言い続ける。そして二年ほどたったある日、住職がいつもの台詞を残して去った後、いつもと違った感情が沸き起こるのを感じた。

カフェ経営から宇久の住職に転身した佐々木浄栄さん（38）。

「世の中にはモノや情報があふれているが、これからは心の時代。いかに心に幸福感を持って生きるかが大切になる。もっと自分を世の中に生かしたい」にわかに視界が開けたような気がした。

カフェでは客と話し込む機会も多かったが、悩み事や苦しみを打ち明けられる機会もあった。世の中には苦労が多く、悩み苦しんでいる人が多い。そんな現実を目の当たりにしていた。日々の暮らしに追われ、人の役に立っていると強く感じることができないまま人生を終えていいのだろうか――。そう考えるようになっていたことが強く背中を押した。

そして、単身で山梨の身延（みのぶ）山に向かい、一年二カ月ほどの修行を積むことになった。

お坊さんになるため島に移住

宇久に来たのは、お坊さんになることを勧めた住職の紹介だった。その寺は、住職の母親が福岡から通う形でお勤めを果たしていたが、高齢となり通い続けることが難しくなっていたことから、引き継ぐ形となった。

「当時は、ただお坊さんになりたい、という思いばかりで、どこのお寺に行くことになるのかまでは考えていませんでした。ですが、流れに身を任せてみようと。人が住んでいない場所ではないので生活もできるはずだ、と何の不安もありませんでした」と佐々木さん。留美さんは「赴任先が島と聞いて、いい！　行きたい！　と思いました」と笑顔をみせる。

ある意味、移住して「事業継承」する形となったが、特に公的な支援制度などは活用しなかったという。

島に来た当初は、Ｉターンということもあり地域に溶け込めるか不安もあったが、すぐに受け入れてもらえたと感じている。

「お坊さんということもあってか、檀家さんはもちろん、そうでない方もとても私を立ててくださいます。『おすそ分け』も多いですし、妻と身一つで海を渡ってきたようなものですが、寂しさを感じたことはないですね」

檀家の減少対策にも取り組みたい

普段の仕事は、葬儀をはじめとするさまざまな法要や祈祷、お祓いなど多岐にわたる。寺の収入は、檀家が納める「護持会費」を基本財源に、お布施や祈祷料などで得たお金を上積みする形だ。

佐々木さんによると、日蓮宗の場合、一般に檀家が一五〇あれば寺を安定して運営できるといわれるが、妙蓮寺の檀家数は約一〇〇軒にとどまる。「寺を保つにはギリギリの

佐々木さんが住職を務める妙蓮寺。

ライン」で、それほど余裕はなさそうだが「檀家総代の方をはじめ、みなさん私の生活を不便にさせてはいけないと、いつも気にかけてくださいます。とても心強いです」と感謝の言葉を口にする。

寺を支えてくれる支援者の思いに応えるため、佐々木さんは「檀家さんの負担を少しでも減らすことができれば」と、島外の法事や行事などにも足を運び、収入を増やしているようだ。

島からのメッセージ

◉島に居続けてほしい若い住職

最初、住職にお会いしたのは、まだ島に来る前でした。のちに妙蓮寺の住職になると聞いていましたが、若い人に来ていただけると分かり、大変うれしかった記憶があります。海で磯歩きをするのも楽しみ、というような話もされていたと記憶していますが、田舎暮らしに向いているのではないか、頑張ってほしいな、と思いました。

住職にお会いした後、檀家の役員が十数人集まって、島に来ていただいたら何とか長い間島に留まってもらえるよう頑張ろう、といった話をしました。

彼はとても勉強熱心で、感心することが多いです。最高の住職ですよ。青年団の一員として地域活動に積極的に参加していますし、郷土芸能グループのメンバーにも加わったりしていて、感心するぐらい地域に溶け込んでいます。人間的にできているからでしょう。

一方で、言うところは言うというか、びしっと芯が通っているところもあって、譲らないところは譲らないですね。

とにかく住職には、長く島に留まってほしいなと考えています。以前は、住職が常住していなかったので、何かあるたびに福岡から通っていただいていましたが、費用も掛かりますし、やはり地元にずっといていただいたほうがわれわれもうれしいです。

ただ今後、お寺が維持できないぐらい檀家が少なくなってしまうと、私たちの希望だけでお引き止めするわけにもいかなくなるので、われわれもなんとか頑張りたいと思っています。

住職には息子さんもいらっしゃいますが、「二代目」として島に残ってくださるようなことになればうれしいです。そんな環境をつくりたいですね。

島はどんどん人が減っていますし、私個人としては移住者が増えることを歓迎しています。よそから人が集まらなければ、宇久はさびれていく一方でしょう。その点、お隣の小値賀島（小値賀町）などは、うまくやっているなぁ、と見ています。

移住者の方には、宇久発展のため、ぜひ力になってほしいです。移住されてこられた方も何人かいらっしゃいますが、島のことをいろいろと考えてくださっているようで頼もしいです。島は私のような年寄りも多いですが、ぜひ一緒に力を合わせられればいいですね。

高校を出た子どもたちが、どんどん島外に出て行ってしまうようになり、人が減ってしまった印象があります。雇用の場があればいいんですが、仕事がないので島を出ていくのでしょう。少しでも新たな事業を起こす人が出てくることが求められていると思います。

空き家もたくさんあるので、活用方法を考える必要があるのではないでしょうか。

（妙蓮寺檀家総代　浦吉友幸）

過疎化が著しい宇久では当然、寺を支える檀家の数も減少傾向にある。それに伴い、住職が常住する寺も大きく減ってしまった。

佐々木さんは「寺は、檀家さんがいるからこそ必要とされるもの。住職だけがいても意味がありません。人口が減る一方で、なかなか先を見通せないのが実情です」と厳しい現実を受け止めつつ、「一年でも長く寺を守るために、島の人口が減らないよう、微力ながらもいろいろなことに取り組んでいくことが目標」と力を込める。

島暮らしで苦労した点は、船を利用しての移動。宇久には空港がないため、出張などで島を出る際には必ず船に乗る必要があるが、当初はスケジュールを組む感覚が分からず苦労したという。

また、島の商店は品ぞろえに限りがあるため、必要なものがすぐ手に入らず困ることもある。だが、インターネット全盛の時代でもあり「ネット通販を活用すれば、それほど不便さは感じない」と話す。留美さんは「島での買い物は、そもそも選択肢がないことが前提。ある意味、悩むことはありません」と割り切った表情だ。

佐々木さんは「島に来て何年もたちましたが、すっかり生活のリズムもつかめました。日々、いい経験をしているなと感じますし、後悔など一切ないです」と笑顔。島に来てから長男も誕生したが、もし将来、島で住職をしたいと言い出した場合に備えて、地盤づくりにも力を入れる毎日だ。

アクアリウム事業で夢見る島おこし

宇久町観光協会事務局長／孫ターン　**檜垣　督（おさむ）さん**

記憶に残っていた母の故郷

約二〇年ぶりだった。大阪府高槻市出身の檜垣督さんは、実母の故郷である宇久島に渡った。記憶に残っていた通り、海は相変わらず美しかった。

島でゆっくり過ごしていたある日、ふらりと泳ぎに行ったときに出会った美しいサンゴやイソギンチャクに目を見張った。

「ずっとアクアリウム（観賞用熱帯魚やサンゴなど水生生物の飼育）業界で働いていたんですが、宇久の海には売り物になるような価値のあるサンゴがゴロゴロしていたんです。これはビジネスになる。そう思いました」

約一年後の二〇一四年春、今度は島での起業を決意して、片道切符で島にやって来た。

檜垣さんがアクアリウム業界に飛び込んだのは二一歳のころ。当時通っていた大学を中退した後だった。

「大学にどうもなじめなくて。バンドなんかもやっていたんですが、自分が本当にやりたいことって何だろうと真剣に考えたとき、頭に浮かんだのが魚にかかわる仕事でした」

もともと魚が好きで、熱帯魚も飼っていた。小学生のこ

ろ、毎年夏休みは宇久で過ごすのが恒例だったが、その時に覚えた釣りが影響しているのかもしれない。

大学を辞め、大阪府内にあるアクアリウムショップで働き始めたところ、すぐにその面白さに夢中になった。いくつかのショップで勤務し、店長やマネージャーも経験しながら約一〇年が過ぎたころ一念発起。埼玉県で熱帯魚などの輸入卸会社を設立し独立した。

事業は好調だったもののトラブルもあり、しばらく仕事から離れてリフレッシュしようと、久しぶりに宇久を訪れた。実家で何気なく見ていたアルバムに宇久の写真を見つけたことがきっかけだった。

壁にぶつかり観光協会に就職

島への移住直後、当面の生活費を稼ぐためアワビの養殖場でアルバイトを始めた。その仕事のかたわら、本来の目的だったアクアリウムビジネス事業の準備を進めた。

アクアリウム事業について話す檜垣督さん（38）。

サンゴなどの水生生物を獲って販売するには、地元の漁業権と県の許可が必要だと分かった。漁業権は、漁協に事業プランを説明するなどして理解を求めることで了承を得ることができた。だが、県の許可が下りなかった。

「動物愛護団体からクレームが来た場合にどう対処するのか、というのが理由でした。粘り強く交渉を続けましたが結局、許可を得ることはできませんでした」

アクアリウム事業は立ち往生した。

その後、檜垣さんは宇久町観光協会に就職。今年四月からは事務局長も任され、観光客のガイドや体験民泊の事務手続き、観光資源の発掘・調査など、島の幅広い観光事業に汗を流す。

「アクアリウムは独自性あふれる大きなビジネスチャンスで、まちおこしにもつながると思っていたので非常に残念です。過疎化が進む宇久のような地域では、やっぱり収入源が大切。それまでにない新たな事業も必要だと考えていました。その意味で、この事業が島の経済に潤いをもたらすと考えるんですが……」

個人で新規事業に挑戦する人がまれな宇久において、檜垣さんのような存在は貴重でもあった。

観光協会でも地域振興策が話題に上るケースが多いものの、いざ具体的なアイデアを出し合うと、「どこかで聞いたことがある」取り組みが多く、オリジナリティに欠けることが多いという。

宇久の豊かな海の恵みを、漁業以外でも生かす。そんな思いに賛同し、漁協が海洋調査に協力してくれたり、いざ

事業化となった場合にはサンゴを獲る役割などを担う形で協力する話も着々と進んでいただけに、無念さが募る。

檜垣さんは「アクアリウム事業は完全にあきらめていません が、現在は遠くに置き去りになっている状態。何らかの形で問題解決の糸口が見つかれば、ぜひ挑戦したいと考えています」と力を込める。

島からのメッセージ

◉交流人口増加のための頑張りに期待

檜垣君が島に移住したと聞いたとき、母親の故郷でもあるし、親戚もたくさんいるようだったので心配はしませんでした。島の子と変わりありません。何かあっても、守ってくれる人はたくさんいるだろうと思いました。

彼がアワビの養殖場でアルバイトをしていたとき、結婚すると言い出したので、それならば一定の収入がある仕事をしたほうがいいと思い、きちんと就職した方がいいとアドバイスしました。それで彼は観光協会で働くようになりました。

現在は事務局長を任せていますが、前任者が今春に退職して、さて誰を据え置こうかと考えていた時に、彼は「僕がやりたい」と自ら手を挙げました。

観光協会としては、交流人口を増やすことが大切だと考えています。檜垣君には知恵を絞ってもらっていますが、ほかの地域と同じことをしてもだめでしょう。責任は重いと思いますが、これからも一所懸命やってくれると考えています。

彼が熱心に取り組んでいたサンゴ（アクアリウム）の事業も、成功すれば島に新たな雇用が生まれたかもしれないし、万が一失敗してもリスクはないという印象を持っていました。県の許可がネックとなり、現在は進んでいませんが、成功していれば島経済の起爆剤になったはずです。

サンゴは、現状を聞く限り事業化は難しいかもしれませんが、観光協会の仕事に差しさわりがなければ、大いに取り組んでもらっていいと思います。

島にＩターンの人が住み着いてくれれば、それはいいことだと思います。ですが、実際はあまりＩターン者は増えていないようです。一人でも二人でも移住者を増やすためには、まず前提として島をよく知ってもらうことが大切で、やはり交流人口を増やすことが重要です。

移住者は、自分で仕事を始めるなり就職するなりして、ご飯を食べられる程度にまで生活を安定させる必要があるでしょう。そうしないと島に残れません。

移住者にあれをしてほしい、これをしてほしい、ということまでは求めません。そこまで言うのは、おこがましい気もします。とにかく、きちんとご飯を食べられるようにしてほしいです。

移住者向けの支援策としては、住居関係が大切ではないでしょうか。空き家はいっぱいあるのに、水まわりがダメだったりと、いろいろな問題を抱えている物件が多いです。修理するにもお金がかかるでしょう。行政には、空き家整備に関する施策を充実させてほしいです。

宇久の魅力は、そうですね、何もないところでしょうか。それと、個性豊かな人が多いです。人が財産かもしれません。

（宇久町観光協会 会長　村上正一）

島との縁で得た島人の協力

島暮らしの経験から、島での起業に関して檜垣さんは「注目が集まりやすいこと」をメリットとして挙げる。島では新しい取り組みは目立ちやすい。ビジネス面ではマイナスに作用することが多い離島という地理的条件がプラスに働く格好で、メディアなどの取材を受ける機会も多いという。

また「島には、ある意味『何もない』ので、物事をゼロから始めることが苦にならない人が向いているでしょう。何もないことがビジネスチャンスにつながり、その点で大きな可能性を秘めているとも感じますが、精神的なタフさは必要かもしれませんね」とみる。

檜垣さんが事務局長を務める宇久町観光協会の事務所。

島での事業立ち上げに欠かせない要素としては「どれだけ地元の人に協力してもらえるかがポイント」と分析。檜垣さんがアクアリウム事業を進めていた際は、地元の漁師さんに自分のやりたいことや島への貢献度を説明することで信頼を勝ち取り、さまざまな面で協力を得ることができたという。

島への移住について、檜垣さんは「正直、島にゆかりのあったことは、非常に大きかった」と振り返る。母親が宇久出身の檜垣さんは、いわゆる「孫ターン」。自分ではあまり意識することはなかったが、島の人からは島に縁がある若者として見られることが多かったと言い、「アウェーなんですがホームのような雰囲気があり、地域に受け入れてもらいやすかった印象があります」。移住一年目から、島暮らしはしっくりしていたという。

地方移住に際してよく言われることではあるが、「地域の行事に参加することは大切」と強調。檜垣さんも、宇久を代表するお祭りでみこしを担ぐことなどにより、地域と一体感を育むことができたという。■

竹内　章（たけうち あきら）
1974年生まれ、富山県出身。元中日新聞社記者。2015年、長崎県五島列島の新上五島町に地域おこし協力隊として移住し活動。今年3月末に3年間の任期を終え、島に定着し離島在住のフリーライターとして屋号「ツムギヤ」で独立。